



# 東日本大震災被災地支援の取り組み

## ▶ 東京・神奈川身障協合同支援チーム

### 結成までの経緯と活動状況

#### 1. 合同支援チームの結成

3月11日東日本大震災発生以来、私たちは同じ日本人として、また社会福祉従事者として何が出来るのか多くの方が悩んでいたと思います。4/2～3に東京「みずき」の中村施設長が単身被災地状況確認の為、宮城から岩手にかけて車で訪問されました。4か所の障害者支援施設や被災地を回られ、壮絶な被害状況に早急な支援の必要性を感じ、帰京後関係機関に被災地レポート発信されました。この中村施設長の行動が合同支援チームの発端と言えます。この後4/16～17にも中村施設長は多摩療護園のチーフリーダー岩谷さんらと共に再度被災地を訪問され、被災地のニーズを確認して帰京されました。東京都身体障害者施設協議会として支援の必要性を確認され、神奈川県身体障害者施設協会へも共に支援体制を作れないかと打診され4/22に初回の合同支援会議を開催しました。会議では現地への支援の必要性について確認し、岩手県社協に対して職員派遣し救援物資の整理・搬送、情報収集の手伝いを行うことを決定しました。派遣は7泊8日を1クールとし、1クール2名、神奈川と東京が交互で派遣することとしました。



コンテナを改造した入浴施設  
「ひかみの湯」

#### 2. 活動の開始

5/9から職員派遣が始まりました。週2回火・金に盛岡から沿岸被災地にある障害者施設への物資搬送、その他の日は全国から集まった支援物資の仕分けや不足物資の買い出しなどの業務を手伝うこととなりました。現地では岩手県社協のA氏やB氏と

行動をともにして、支援活動を行うことになりましたが、派遣された職員の皆さんは実際に自分の目で被災地の状況を見たり、A・B両氏や現地施設の職員から震災発生時やその後の状況を聞くことで、報道で見聞きするだけとは違う感覚で被災地の状況を捉える事が出来たようです。A氏はそれも大切な支援であり、見聞きしたことをそれぞれの施設に持ち帰って伝えてほしいと話されています。

またこの間、神奈川重症心身障害児施設協会の一部施設や、(社福)千葉福祉援護会が合同支援チーム参加するなど少しずつ支援の輪も拡大していきました。

#### 3. 支援内容の転換

7月に入り被災地状況も物資面では落ち着きつつあり、物資の搬送も週1回水のみになりました。合同支援チームは以後の支援の在り方について協議する必要性が出てきました。岩手県社協からの情報により、全国脊髄損傷者連合会が主体となり複数団体と共同して陸前高田市の障害者支援施設ひかみの園に設置された、身体障害の方でも入浴できる施設「ひかみの湯」への職員派遣について調整を進め、我々の専門性ともマッチングすることから支援内容をそちらに変更することになりました。そして9月から新しい内容で支援しております。

#### 4. 今後の活動について

今後も職員派遣による支援を継続しますが、終了時期を合同支援チームとしては「岩手県内での支援体制が整うまで」とし、当面23年度内いっぱい継続できるように準備するつもりでいます。また長期化に伴い関東甲信越地区身体障害者施設協議会へも人的・金銭的バックアップを依頼しているところです。今回の甚大な被害から復興するためには、職員派遣終了後も間接的な支援を長期的に行っていく必要があります。神奈川身障協の会員施設におきましても、継続して自分達ができる支援で協力していただきますようお願いいたします。

東京・神奈川身障協合同支援チーム事務局

松本圭司 (れいんぼう川崎所長)

## ▶ 派遣者レポート

東京・神奈川身障協合同支援チームとして派遣されたスタッフからのレポートを一部抜粋して掲載致します。現地で被災地を目の当たりにした衝撃とともに障害福祉サービス従事者の視点で捉えられた所感や感想が寄せられています。

岩手県(障害関連)では、このニーズを多くの関係者と報告し合う会議(障害関連の方は誰でも出席できる)を週に2回設け実態の把握と支援方法を調整されていました。この会議の報告から作業所関係者から事業も開始し生産作業も始めてきていることが報告としてあげられていました。しかし、生産した製品を販売する場がない等の意見があげられていました。また、その他に季節に沿った衣類、帽子等に支援物資が変化していること等が報告されていました。

【守屋進氏(丹沢レジデンシャルホーム) / 第1クール(5/9～15)】

(現地の)施設長に話を伺うと、この施設は海拔15m～20m位のところに位置しているらしいが、震災当日は床上まで水が入り込んできたとの事。その為、すぐ横にある小さな丘の上に皆で避難し、からくも津波から逃げ切れたそうである。また、地震発生時間が14時台であったことが被害をこれでも小さくしたのだとも語っていた。それは、利用者の皆様が通所している時間帯であったからである。もし、地震発生時間が朝早い時間であったなら、帰宅途中や帰宅後であったならば、どれほどの犠牲者が出ていたか分からないということである。

【福田勝範氏(ソーレ平塚ケアセンター) / 第5クール(6/5～12)】

仮設にお風呂はあるが収入が見込めず、そのため水光熱費が払えず、お風呂を節約したり使用をしていない方も多くいました。障害者や高齢者に関わらず困っている人にも入浴していただきたいとおもいました。仮設住宅は山に沢山あり交通の不便さや送迎や冬場の大雪などが心配になりました。瓦礫の撤去状況は市町村によって差があり、釜石や大船渡はまだまだ陸前高田市はだいたい片付いていましたが今後どうするのか不安になりました。震災の爪痕は大きく、復興はまさしくこれからだと思いました。

【谷林由朗氏(太陽の門福祉医療センター) / 第15クール(8/14～21)】

A氏(社協職員:現地コーディネーター役)等が被災地を案内していただく時間を取っていただくがため、A氏達と被災地職員とのコミュニケーションの時間が短くなり、かえってご迷惑をおかけしているのではないかと感じた。なお、このことはA氏に相談してみたが、「あなたたちに事実をしっかり見ていただくことは意味のあること」との言葉をいただいた。

【辻川彰氏(よこはまりパーサイド泉) / 第9クール(7/3～10)】

震災から4カ月経ち自分自身もそうだが、自分の周りも少なからず、震災があったことから意識が薄れてきているように感じられる。今の自分にできることは自分が見てきたものをそのまま近くの人に伝えること。今も被災地では多くの人が苦しい状況の中前を見て進んでいるということを伝えていくことぐらいしかできないが、せめて自分の周りだけでも震災への意識が薄れないようにつとめ、支援が長く続くようにしていきたい。

【山内祥吾氏(横浜らいず) / 第9クール(7/3～10)】



気仙沼市の状況(2011年5月)

## ● 編集後記

- ◆ 地震、津波、台風、豪雨と続いている自然災害の前には、なすすべもない人間の力の弱さを思い知らされます。それでも被災された方々の事を思うと、何か出来る事はないかと考え、行動できる強さもまた人は持ち合わせています。人ごとにせず、まず知り、それを伝え、長く続けること。この震災特集でまた教えられました。(佐藤)
- ◆ 広報委員会での活動3年目を迎えて、事務局を担わせていただくこととなりました。年2回の発行ではありますが、なるべく多くのかたに携わって頂けるような紙面になればと思っています。(向井)
- ◆ 身体障害の方の生活支援に携わり5年目を迎えます。これまでは”井の中の蛙”でしたが、紙面作りを通して、神奈川の各施設の取り組みや発想を学び、横とのつながりを大切に仕事をしていかれたら幸いです。(野口)
- ◆ 去年に引き続き「みらい」の紙面デザインを担当させていただきます。今年も少しでも読みやすい紙面を目指して編集を行ってまいりますのでよろしくお願いいたします。(町田)